

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成 2 3 年 3 月 9 日

農林水産省

青森県

1 品種構成の動向

平成18年の「まっしぐら」の導入以降、「つがるロマン」及び「まっしぐら」を中心にした品種構成となっており、近年、耐倒伏性・いもち病抵抗性に優れる「まっしぐら」の作付割合が上昇傾向にある。

2 栽培技術等の動向

売れる米づくりを推進するため、適地適品種の作付けと適正な施肥管理の徹底等の指導が行われている。

また、地帯別作付面積の動向をみると、収量水準の高い津軽地帯の作付割合が上昇している。

3 気象と収量構成要素の推移

近年、登熟期間の平均気温はおおむね横ばいとなっている。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数及び登熟（千もみ当たり収量）ともおおむね安定している。

<最近の作柄（平成16年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数	
				9/15	最終
H16	—	○	—	102	101
17	—	○	○	103	103
18	—	—	—	100	100
19	—	×	—	99	99
20	—	○	○	105	105
21	—	—	—	100	101
22	×	◎	—	100	100

注：◎：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み
×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない）
ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

作付面積割合の高い津軽地帯で「まっしぐら」の作付けが増加し収量水準が上昇していると同時に、収量水準の高い当該地帯の作付面積割合も上昇していることから、県全体の収量水準は上昇している。

<品種別作付面積の動向>

（県全体）

主な 品種名	作柄表示地帯	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
			H18	19	20	21	22	23 (見込)
つがる ロマン	青森	595	5.6	5.7	5.9	5.5	5.2	5.2
	津軽	608	46.7	42.7	43.9	41.5	38.4	33.6
	南部・下北	546	5.7	5.2	5.6	6.5	6.0	6.0
まっし ぐら	青森	544	1.4	4.6	4.5	4.8	4.9	5.1
	津軽	626	2.8	11.3	11.2	14.6	18.0	23.5
	南部・下北	549	6.4	23.5	23.1	22.2	22.8	23.3
単収試算値の対前年差(kg)						0.7	0.6	0.9

（津軽地帯）

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
つがるロマン	608	79.9	72.5	74.3	69.6	64.4	56.3
まっしぐら	626	4.9	20.1	19.5	25.6	31.1	40.5
ゆめあかり	604	6.7	0.1	0.1	—	—	—
単収試算値の対前年差(kg)					1.7	1.0	1.7

※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。

平成23年産見込は種子の予約数量から推計。

単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

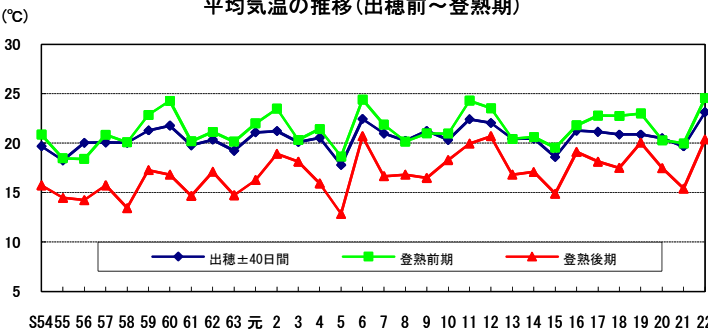
<地帯別作付面積の動向>

地域（地帯）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
青森地帯	574	10.7	10.9	11.0	10.9	10.7	10.6
津軽地帯	611	57.6	58.0	58.6	58.6	58.9	59.1
南部・下北地帯	552	31.7	31.1	30.5	30.5	30.4	30.3
単収試算値の対前年差(kg)					0.0	0.1	0.1

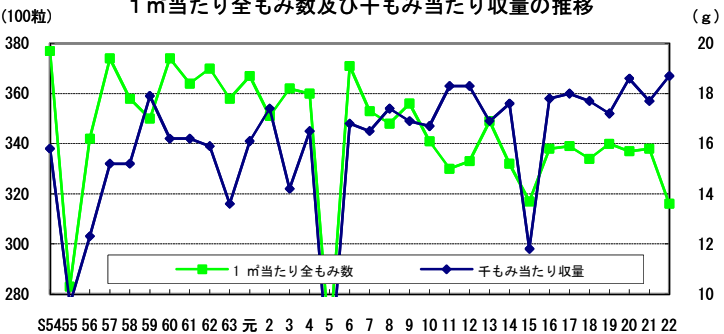
※ 平成23年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

<平均気温、もみ数及び登熟の推移>

平均気温の推移（出穂前～登熟期）



1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



茨城県

1 品種構成の動向

主力品種の「コシヒカリ」が減少する一方、「コシヒカリ」に比べ収量水準の高い「あきたこまち」等が増加するとともに、近年、より多収性の「あさひの夢」も導入されている。

2 栽培技術等の動向

「コシヒカリ」の適期田植えの徹底、適期・適切な中干しによる茎数管理、穂肥の適期・適量施肥等高品質米の安定生産に向けた栽培が行われている。

また、地域別作付面積の動向をみると、中山間地域の低収量地帯の作付割合が低下している。

3 気象と収量構成要素の推移

近年、登熟期間の平均気温及び日較差はやや上昇傾向となっている。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数が抑えられる傾向にある中、登熟（千もみ当たり収量）は安定しつつ上昇傾向にある。

<最近の作柄（平成16年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数	
				9/15	最終
H16	○	○	◎	107	107
17	—	○	○	103	103
18	×	○	×	97	97
19	×	—	×	98	98
20	—	○	○	103	103
21	×	○	—	100	100
22	×	○	—	100	100

注：◎：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み
×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない）
ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

「コシヒカリ」に比べ収量水準の高い品種の作付割合の上昇に加え、収量水準の低い地域の作付割合が低下していることから、収量水準は上昇している。

<品種別作付面積の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
コシヒカリ	533	81.3	80.9	78.2	78.5	76.5	76.4
あきたこまち	549	9.6	9.7	9.6	10.3	11.0	11.1
ゆめひたち	549	3.2	3.3	3.9	2.7	3.8	3.7
キヌヒカリ	559	1.4	1.6	1.7	1.1	1.5	1.7
ひとめぼれ	554	1.1	1.1	1.1	1.3	1.3	1.3
チヨニシキ	538	0.9	1.2	0.9	0.9	1.2	1.2
あさひの夢等	578	...	...	...	0.6	0.6	0.7
単収試算値の対前年差 (kg)					0.1	0.4	0.1

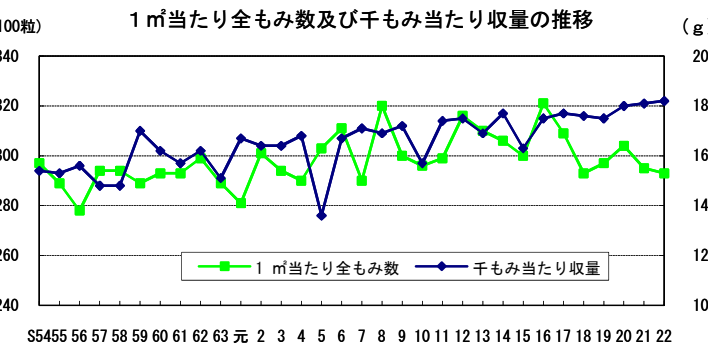
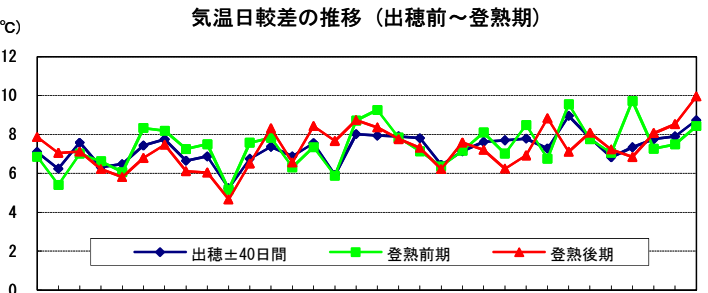
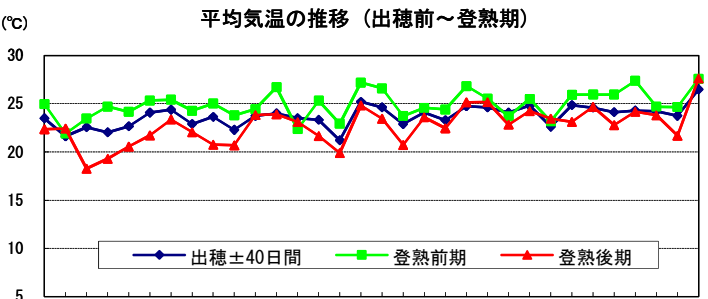
※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。
平成23年産見込は種子の予約数量から推計。
単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

<地域別作付面積の動向>

地域名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
高収量地域	540	18.0	18.2	18.5	18.5	18.6	18.8
中収量地域	523	76.2	76.1	75.9	76.0	76.3	76.2
低収量地域	483	5.8	5.7	5.6	5.5	5.1	5.0
単収試算値の対前年差 (kg)					0.0	0.2	0.1

※ 平成23年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

<平均気温、気温日較差、もみ数及び登熟の推移>



栃 木 県

1 品種構成の動向

主力品種の「コシヒカリ」が減少する一方、収量水準の高い「あさひの夢」及び「なすひかり」が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

品質や食味の向上を図るため、水管理の徹底、生育診断に基づく適正な肥培管理等の指導が行われている。

3 気象と収量構成要素の推移

近年、登熟期間の平均気温及び日較差はやや上昇傾向となっている。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、登熟（千もみ当たり収量）はおおむね安定している。

<最近の作柄（平成16年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数	
				9/15	最終
H16	○	○	◎	107	107
17	—	—	○	103	102
18	×	×	×	94	94
19	—	—	—	99	99
20	○	—	—	101	101
21	×	○	—	100	101
22	×	○	—	99	99

注：◎：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み
×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない）
ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

「コシヒカリ」に比べ収量水準の高い「あさひの夢」の作付割合が上昇していることから収量水準は上昇している。

<品種別作付面積の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
コシヒカリ	548	84.9	84.3	83.8	82.0	78.5	78.0
あさひの夢	553	8.7	9.7	9.9	11.5	14.6	15.4
なすひかり	614	1.1	3.0	3.7	4.2	4.8	4.9
単収試算値の対前年差(kg)					0.4	0.6	0.1

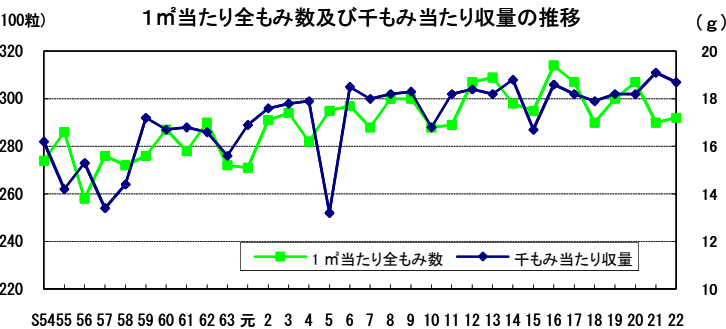
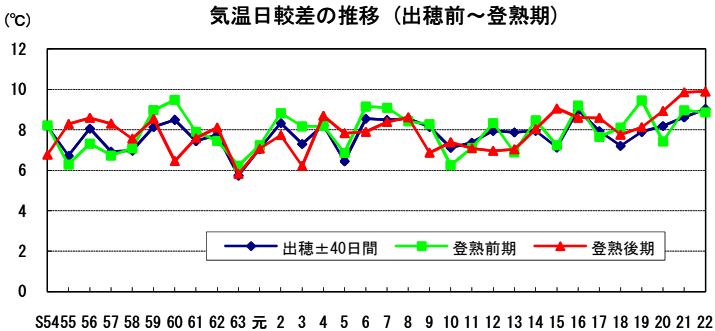
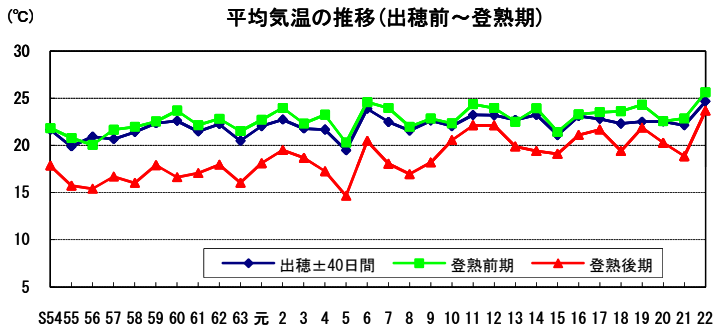
※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。
平成23年産見込は種子の予約数量から推計。
単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

<地帯別作付面積の動向>

作柄表示地帯	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
北部地帯	562	38.7	39.2	39.9	40.0	39.9	39.9
中部地帯	545	35.5	35.3	35.3	35.3	35.3	35.3
南部地帯	503	25.8	25.6	24.8	24.8	24.8	24.8
単収試算値の対前年差(kg)					0.0	0.0	0.0

※ 平成23年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

<平均気温、気温日較差、もみ数及び登熟の推移>



高 知 県

1 品種構成の動向

品種構成に大きな変化は見られないが、近年、登熟期間の高温による品質低下が問題となっていることから、高温耐性品種で収量水準の高い「にこまる」の作付拡大が図られている。

2 栽培技術等の動向

品質向上のため、適正な肥培管理、適期防除、適期刈取りの指導や、温暖化の進行に対応するため、早期栽培で疎植栽培、普通期栽培で遅植え等の指導が行われている。

また、地帯別作付面積の動向をみると、収量水準の低い西部地帯の作付割合が低下している。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の最低気温が横ばいとなっている。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数及び登熟（千もみ当たり収量）ともおおむね安定している。

<最近の作柄（平成16年産以降）>

年次		全もみ数	登熟	被害	（作最 況終 指 数）
H16	早期	×	◎	—	103
	普通期	×	×	×	81
17	早期	—	○	○	103
	普通期	○	—	○	102
18	早期	—	×	×	93
	普通期	×	—	×	94
19	早期	○	×	×	95
	普通期	—	○	—	102
20	早期	—	◎	◎	106
	普通期	◎	○	◎	109
21	早期	○	—	○	103
	普通期	—	○	○	102
22	早期	×	◎	×	98
	普通期	×	◎	×	97

注：◎：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み
×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない）
ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の低い西部地帯の作付割合が低下していることから、収量水準は上昇している。

<品種別作付面積の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
コシヒカリ	478	60.0	59.4	59.7	58.2	57.2	57.8
ヒノヒカリ	440	23.1	24.8	25.2	25.7	26.6	25.0
黄金錦	390	5.2	4.2	3.7	3.6	2.8	3.3
ナツヒカリ	498	3.0	2.6	3.1	3.2	2.9	2.7
あきたこまち	482	2.7	2.4	2.3	2.1	2.4	2.0
にこまる	493	—	—	0.2	0.2	0.5	1.5
単収試算値の対前年差(kg)				0.7	-0.7	0.2	0.4

※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。

平成23年産見込は種子の予約数量から推計。

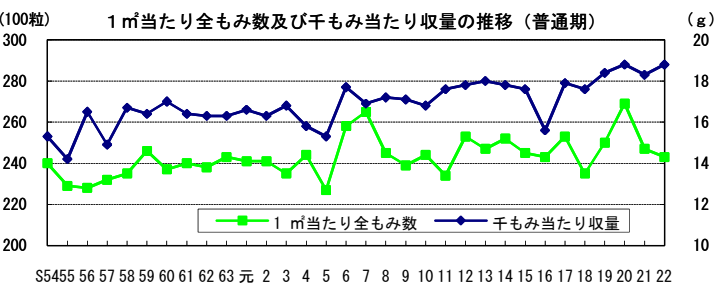
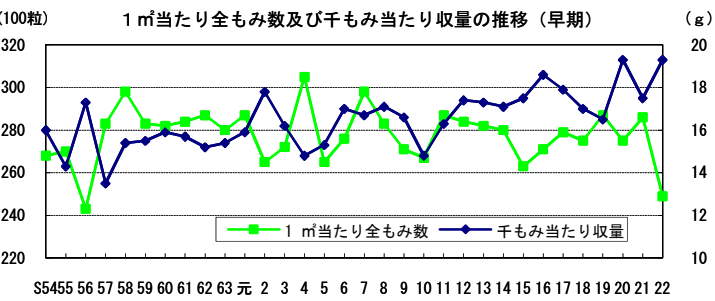
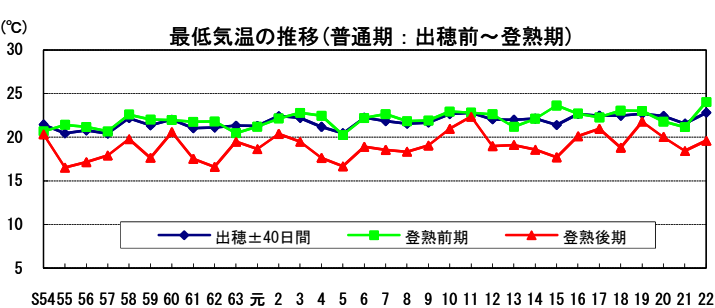
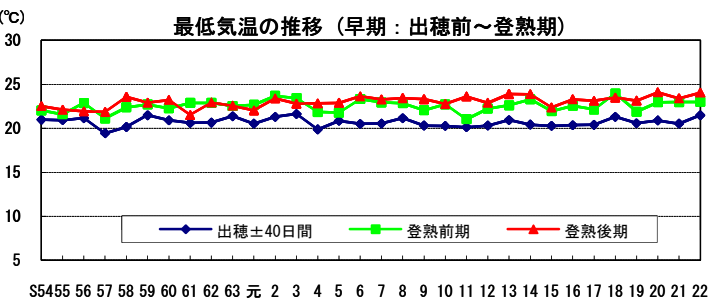
単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

<地帯別作付面積の動向>

作柄表示地帯	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
中東部	474	57.6	57.7	57.5	57.7	58.8	59.2
西部	428	42.4	42.3	42.5	42.3	41.2	40.8
単収試算値の対前年差(kg)					0.1	0.5	0.2

※ 平成23年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

<最低気温、もみ数及び登熟の推移>



宮 崎 県

1 品種構成の動向

主力品種の「ヒノヒカリ」が減少する一方、良食味で収量水準の高い「まいひかり」が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

適正な栽植密度の確保、移植時期の後進化、土壌診断に基づく適正施肥等の推進、根の活性化促進等のための適正な水管理の徹底等の指導が行われている。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の最低気温が横ばいとなっている。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、登熟（千もみ当たり収量）はおおむね安定している。

<最近の作柄（平成16年産以降）>

年次		全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
H16	早期	◎	—	◎	109
	普通期	○	××	××	86
17	早期	◎	××	○	105
	普通期	×	×	××	91
18	早期	—	—	—	100
	普通期	××	—	××	91
19	早期	—	××	××	43
	普通期	××	○	—	99
20	早期	—	◎	◎	106
	普通期	○	×	○	102
21	早期	◎	—	◎	109
	普通期	×	◎	—	101
22	早期	×	○	—	100
	普通期	×	◎	—	100

注：◎：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み
×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない）
ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

「ヒノヒカリ」に比べ収量水準の高い「まいひかり」の作付割合が上昇していることから、収量水準は上昇している。

<品種別作付面積の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
ヒノヒカリ	513	52.6	51.9	51.7	51.1	50.9	49.7
コシヒカリ	508	42.6	42.4	42.2	42.4	41.4	41.7
まいひかり	618	0.4	1.4	1.8	2.6	3.4	4.5
さきひかり	608	0.4	0.5	0.4	0.2	0.5	0.4
単収試算値の対前年差(kg)						0.7	1.4

※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。

平成23年産見込は種子の予約数量から推計。

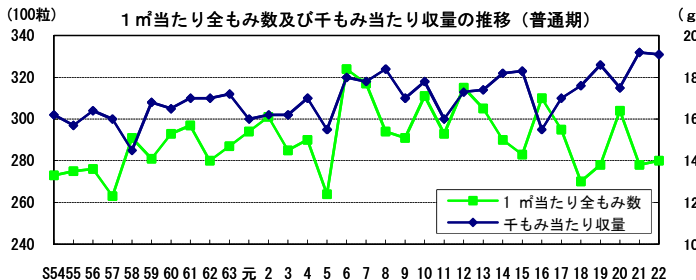
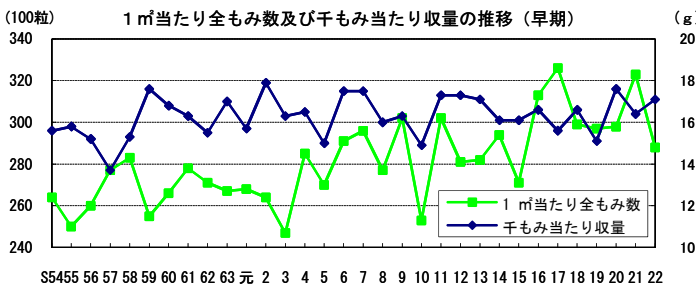
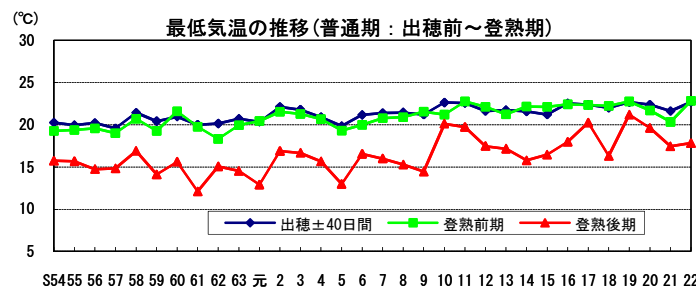
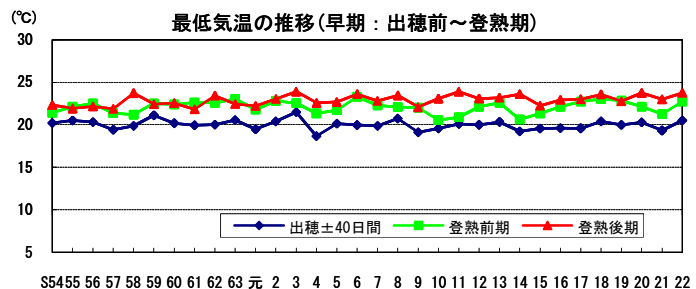
単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

<地域別作付面積の動向>

地域名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
高収量地域	512	25.6	25.6	25.4	25.3	25.6	25.7
中収量地域(普通)	470	30.7	30.9	31.5	31.3	31.6	31.3
中収量地域(早期)	492	17.2	17.0	16.8	17.1	17.0	17.1
低収量地域	488	26.5	26.5	26.3	26.3	25.8	25.9
単収試算値の対前年差(kg)						0.0	0.0

※ 平成23年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

<最低気温、もみ数及び登熟の推移>



鹿 児 島 県

1 品種構成の動向

台風等の災害からの危険分散を図るため、「ヒノヒカリ」や「コシヒカリ」が減少する一方、良食味で収量水準の高い「あきほなみ」や「イクヒカリ」が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

高品質米の生産に向けて、適正な栽植密度の確保、適正な施肥、水管理等の指導が行われている。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の最低気温が横ばいとなっている。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、登熟（千もみ当たり収量）はおおむね安定している。

<最近の作柄（平成16年産以降）>

年次		全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
H16	早期	—	○	◎	106
	普通期	○	××	××	88
17	早期	◎	×	○	105
	普通期	—	×	××	95
18	早期	—	—	—	99
	普通期	××	×	××	88
19	早期	—	××	××	68
	普通期	—	○	○	103
20	早期	×	◎	◎	106
	普通期	○	—	—	102
21	早期	—	◎	◎	106
	普通期	×	◎	○	102
22	早期	×	○	×	98
	普通期	×	◎	—	100

注：◎：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み
×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない）
ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み
×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

「ヒノヒカリ」に比べ収量水準の高い「あきほなみ」等の作付割合が上昇していることから、収量水準は上昇している。

<品種別作付面積の動向>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
ヒノヒカリ	495	64.8	65.1	64.6	64.6	62.6	60.8
コシヒカリ	465	23.9	23.5	22.8	22.1	21.5	21.1
はなさつま	509	4.7	5.2	5.3	5.8	3.9	3.9
あきほなみ	541	—	—	—	0.8	3.4	6.8
イクヒカリ	496	—	—	—	1.0	1.9	2.3
単収試算値の対前年差 (kg)					0.8	1.1	1.9

※ 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均（以下同じ。）。
平成23年産見込は種子の予約数量から推計。
単収試算値とは、上記作付面積割合を踏まえて試算した数値である（以下同じ。）。

<地域別作付面積の動向>

地域名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H18	19	20	21	22	23 (見込)
高収量地域	488	50.7	50.9	51.9	52.2	52.3	51.6
中収量地域	453	44.7	44.5	43.5	43.1	42.9	43.6
低収量地域	422	4.6	4.6	4.6	4.7	4.8	4.8
単収試算値の対前年差 (kg)					0.1	0.0	-0.2

※ 平成23年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

<最低気温、もみ数及び登熟の推移>

